

地域通貨の2つの意義に対する 歴史的アプローチ

An Historical Approach to the Two Significant Roles of Local Currencies

丈 島 崇

Local currencies have two significant roles to play, namely in stimulating the local economy and in building a sense of community. During the 1930's, its significance was basically limited to stimulating the local economy, while by the 1980's, this additional role of community building was coming to the fore. In recent years, there have been examples of this role being the main one. In this paper, I demonstrate from an historical perspective how a variety of significant roles are played by the use of local currency.

Takashi Joshima

JEL : I, N P.Z

キーワード：地域通貨、歴史、多様性

Key words : Local currency, History, Diversity

1. 地域社会における地域通貨の有効性について

1. 1 : 地域通貨の機能について

地域通貨の意義については、コミュニティの再生という機能が1980年代以降新たに登場してきたかのように述べられることがある。しかし、そうした機能は地域通貨にもともと備わっている機能である。また、地域通貨の歴史を参照すると、地域通貨元来の意義は地域経済の活性化にあり、コミュニティの再生ではなかった。そうした意義を確認するためには、こうした地域通貨の歴史的アプローチが最適であり、歴史的にその意義を確認していくこ

とにより地域通貨の今後求められる役割についてを本稿では明らかにする。

その前に地域通貨とはどのようなものかを概観しておく。地域通貨の機能として、西部（2006）は次の6つをあげている。それぞれ、①自主的な発行・管理、②地域限定流通、③無利子あるいは負の利子、④信頼と共同、⑤協同的生費者、⑥言語的表現・伝達である。また、地域通貨は任意の団体が自主的に発行・運営管理を行うことができるとし、地域内での財やサービスの取引を活発化し、貨幣の退蔵からくる有効需要不足を解消するとしている。また、地域通貨の「無利子」には信頼に基づく相互扶助という意味合いがある。そして地域通貨は信頼や協同に基づいて流通するとしている。それにより、相互扶助の輪が広がっていくのである。さらに地域通貨は各地域ごとの質的な多様性を表現し、伝達するためのメディアとして利用されると述べる。地域通貨のネーミングには地域の地理や地名を表したもの（例えば、北海道栗山町「クリン」など）、地域の特産品や特徴を表すもの（千葉の落花生から「ピーナッツ」）、様々なものがある。

このような機能を持つ地域通貨は「貨幣的な「経済メディア」の側面」¹⁾であるだけでなく、「言語や文字などの「拡充メディア」でもあるので、「統合型コミュニケーション・メディア」²⁾と言えるのである。

図1にそれぞれの年代別・機能別に類型化したものをあげる。

	1930年代	1980年代以降
地域経済活性化	労働証明書：泉(2000), Gesell(1920), Herland(1977), Kennedy(1995), Keynes(1936) 復興証書：Greco(1994) スタンプ代用貨幣：泉(2000), Fisher(1933)	TORONTO DOLLAR：泉(2000), Greco(1994) ITHACA HOURS：泉(2000), 三上(2001) WIR：泉(2000), 森野(2000)
コミュニティの再生		LETS：泉(2000), 川野(2002), 西部(2006) TIME DOLLARS：泉(2000) RGT：廣田(2000)

図1：年代別・機能別に見た地域通貨の類型化

出所：筆者作成

1) 西部（2006）、41 ページより引用。

2) 西部（2006）、41 ページより引用。

1. 2：地域通貨の重要性について

地域通貨を「積極的に進めようとする多くの議論の中に銀行による貨幣創造への批判という側面」³⁾があり、金子（2010）によれば、地域通貨は「投機的活動や為替変動から遮断する効果」⁴⁾があり、「グローバル化された資本主義市場経済が人々の「日常の世界」にもたらす不安定性に対して、一つのセーフティネットとして機能する可能性」⁵⁾があるとしている。このように、地域通貨は銀行による貨幣創造による投機的活動やグローバリゼーションへの対抗策としての意味もある。

グローバリズム（あるいはグローバリゼーション）とは、Stiglitz（2002）によると、「世界中の国と人間をより緊密に統合すること」⁶⁾であると定義される。Stiglitz（2002）は、グローバリゼーションの長所を認めつつも（グローバリゼーションによってもたらさせる恩恵として、新しいテクノロジーの導入、新しい市場へのアクセス、新しい産業の開拓をあげている）、Stiglitz（2006）において、経済のグローバル化に反対する者達の意見として次の5つをあげている。すなわち、①グローバル化のルールが先進工業諸国に有利になるように設定されている、②グローバル化によって物質的利益を重んじるようになる、③グローバル化によって発展途上国の主権の大部分を奪われ、その国の自己決定能力をなくしてしまった、④グローバル化により先進国と途上国の双方に数多くの敗者をつくりだしてしまった、⑤グローバル化によって国情を無視した経済システムを押し付けられ、大きな損害をもたらしているということである。

これらの指摘はリカードウ（David Ricardo）の比較優位論からくる自由貿易論が必ずしもうまく機能するわけではないということの意味している。このリカードウの自由貿易論は必ずしも普遍的なものではないという指摘もある。Keynes（1917）はこのことについて次のように述べる。「前章で述べ

3) 内野（2003）、278 ページより引用。

4) 金子（2010）、146 ページより引用。

5) 金子（2010）、146 ページより引用。

6) Stiglitz（2002）、邦訳は 27 ページより引用。

たように、リカードウの正しい理解に必須の主要条件は、彼の推論が行われる諸仮定の正確な決定である。しかしながら、これらの仮定がなんであるかを発見することは、通常読者自身の俊敏さに任されている。リカードウ自身はそれらを決して明示的に打ち立てなかった——恐らく彼にとってそれらは決して恣意的な抽象ではなく、特に注意を喚起することは不必要な、明白な事実に思われたからである。この理由は彼の個人的事情に、そして彼の時代の一般的な経済的諸条件に見いだされるべきである。彼の基本的な仮定は徹底的な抑制されない競争の作用である。……（略）……真に重要なことは、産業世界自体において、国内取引に関する限り、競争原理が非常に活発であり、無遠慮的であった時期に彼が執筆したことである。……（略）……／リカードウの推論の多くに含まれる1つの小さな仮定は、1国において消費されるすべての農業生産物はその国自体の中で生産されるということである。これはまた、不足の年を除けば、小麦の輸入が実質上禁止された時代にすべき自然な仮定であった。たとえ自由貿易が実際政治の範囲内にあるように思われていた場合でさえ、北アメリカおよびインドの小麦生産能力の発展が、安価で迅速な運送手段の発見と結合して、イングランドが自らのために生産する小麦および小麦粉の数量のほぼ2倍を輸入する事態をもたらすだろうとは、リカードウは予想することはできなかった。たとえその可能性が熟慮される場合でさえも、このような事態は、事実からは非常に遠く離れているので、その経済的結果を議論する価値はないものとするように思われたであろう⁷⁾とある。

前述のように、それら自由化の中で地域通貨と関連があるのは金融の自由化である。金融の自由化とグローバリゼーションは経済危機を発生させ、その危機を世界中に連鎖させてゆく⁸⁾。Shumpeter (1934) が述べるように、銀

7) Keynes (1917)、邦訳は208-209ページより引用。

8) この点について金子(2010)では次のように述べる。「……金融自由化とグローバリゼーションは、多くの新興国に大量の資金流入を可能にしたが、これらの逃げ足の速い資金が流出すると、たちまちその国は経済危機に陥ってしまう。たとえば、九八年のロシア危機や九九年のブラジルの通貨暴落が他の中南米諸国（とりわけアルゼンチン）の通貨不安に波及するケースなどが、それに当たる。そして現在は、アイスランドやバルト三国からドバ

行による信用の供与は本来、「経済を企業者の目的に服従させる命令、彼が必要とする財貨に対する指図、彼に対する生産力の委託という働きをする。このようにして始めて経済発展が遂行され、単なる循環の域を脱する」⁹⁾ ために使用されなければならないが、金融の自由化とグローバリゼーションのもとでは、投機的な関心からバブルを発生させ、そこからバブルの崩壊、経済危機を引き起こすのである。

こうした経済危機が引き起こされると、信用収縮が発生し、地域の中小の産業に資金が注入されなくなる。結果として、中小の産業で倒産が起ころ、失業者が大量に発生し、地域の治安が悪化する。さらには地域の産業に魅力がなくなり、若い世代の労働力が都市に流出する可能性がある。こうして、地域の経済とコミュニティが衰退していくのである。また、Stiglitz (2006) が述べるように、グローバリゼーションは非物質的なものに関心をよせなくなる傾向がある。それにより、地域の文化など質的なものが衰退していく可能性がある。前述の地域通貨の機能を活用することで、こうした衰退を再生・活性化する上で非常に重要であろうと考えられる。

2. 1930年代の地域通貨とその機能停止

2.1：シルビオ・ゲゼルの自由貨幣論とその実践

前節において地域通貨はグローバリゼーションからの地域社会の衰退に対して有効であることが明らかとなった。以下の節では地域通貨の意義を歴史的に考察する。1800年以降ではイギリスのガーンジー島の事例やオーウェン (Robert Owen) の労働証明書、プルドン (P.J.Proudhon) の「交換銀行」をあげることができる¹⁰⁾。そういった中で多大な効果を上げることができた

イに及び、東欧諸国にその危機が波及する危険性が高まっている。九〇年代に入って、しばしば生じたように、グローバル化した国際金融市場では、こうしたケースは通貨危機の伝染をもたらし、それがアメリカ自身にも跳ね返ってくる危険性を秘めている」、31-32ページより引用。

9) Schumpeter (1934)、邦訳は273ページより引用。

10) この点について泉 (2000) は次のように述べる。「地域通貨の実践例は、歴史的に比較的

のは 1930 年代におけるヨーロッパ及び北アメリカで実施された地域通貨であり、その理論的支柱となったのがドイツの商人であり、経済学者でもあった Gesell (1920) における自由貨幣論がある¹¹⁾。

ゲゼル (Silvio Gesell) は恐慌の原因は商品価格の下落への予想だけで十分であるとし、このような事態が生じると市場からの貨幣の撤退という事態が生じると述べる。彼は貨幣の役割を「交換手段以外の何物でもない。つまり、商品交換を容易にし、物々交換の孕む困難性を克服すること」¹²⁾であると述べ、恐慌による貨幣の撤退という事態をなくするためには貨幣の別の商品

多く見られ、様々な形態で行われている。1800 年以降で、まず挙げられるのはイギリスのチャンネル諸島にあるガンジー島の事例である。ナポレオン戦争後の島の経済復興対策として、島政府が独自に通貨を発行した。また次章において取り上げることになるが、現在世界で最も普及している地域通貨システム「LETS」をデザインする際に参考にしたといわれているオーウェン (Robert Owen) の「労働証書」(labour notes) は、1832 年にロンドンで導入された。オーウェンは、1829 年にアメリカからイギリスへ帰った後、「平等な労働交換」(the equitable labour exchange) というコンセプトを掲げ、消費者協同組合の組織構造に財によって担保された独自通貨のアイデアを組み込もうとした。各々の労働は、生産した財に対して原材料の価値と、財を生産するのに必要とされた平均労働時間を反映した「労働証書」(labour notes) を報酬として受け取り、労働交換所において他の参加者が提供する様々な財と交換することができた。6 ペンスの労働証明書は、1 時間の労働に等しい価値を持っていた。流通している労働証書は、財のストックの価値に一致すると想定されていた [Offe, 1992]。1833 年 8 月の時点で、この労働交換組織に参加していたのは約 500 名であった [Oliver, 1958]。しかしながら、1833 年秋になると支払いが困難な状態に陥り、システムに対する当初の信頼や満足が減退し、そしてメンバーが急速に減少したため、1834 年 5 月以降「労働証書」は全く発行されなくなり、結局失敗に終わった。また 1848 年～49 年にかけて、プルードン (P.J.Proudhon) によって、国民通貨とはまったく違う一種の銀行券を発行する「交換銀行」や「人民銀行」の実現に向けての活動がなされたが、実施までには至らなかった。……、19-20 ページより引用。

11) この点について泉 (2000) は次のように述べる。

「1930 年代前半にヨーロッパや北アメリカで、特定の地域にのみ流通する補完通貨 (complementary currency) が一斉に導入され、一部では失業率の大幅な低下などの経済的効果が現われていると思われる事例がある。このような 30 年代の地域通貨の理論的背景としては、アルゼンチンで成功したドイツの商人であり、エコノミストでもあったシルビオ・ゲゼル (Silvio Gesell) の 1916 年に出版された著書「自由土地と自由貨幣による自然的経済秩序」(Die natuerliche Wirtschaftsordnung durch Freiland und Freigeld) をあげることができる。……」

泉 (2000)、20 ページより引用。

12) Gesell (1920)、邦訳は 411 ページより引用。

に対する特権を排除することであると述べる（ゲゼルが『自由地と自由貨幣による自然的経済秩序』を書いた時代には貨幣の原材料として金が使用されており、金は腐敗しないなどの特性があり、これにより別の商品所有者と違い、貨幣の販売を遅らせることができる。一方で別の商品所有者は時間とともに商品が腐敗していくため、その販売を急ぐ必要がある。こうした金の特性をゲゼルは排除しなければならないと考えていた）。

そのためにゲゼルは自由貨幣を提唱する。この貨幣は週ごとに0.1%ずつ、年に5%減価する仕組みであり、自由貨幣が適用される結果、恐慌の廃絶、投機的な活動の廃絶、貨幣の利子の廃止、失業の除去などが想定されている。

こうしたゲゼルの思想についてケインズ（J.M.Keynes）は次のように評価している。「……それ（筆者注：ゲゼルの思想）は、古典派の仮説を受容する代わりにそれらを拒絶し、競争を廃棄する代わりにそれに足枷をはめようとする点、マルクスとは似ても似つかぬ理論的基礎の上に築き上げられた、自由放任に対する反動である。将来、人々は、マルクスよりもゲゼルの精神からより多くのものを学ぶだろう、そう私は信じている。『自然的経済秩序』の序文を読めば、そこには彼の道徳的資質が遺憾なく発揮されているのがわかるだろう。思うに、彼のマルクス主義への回答はこの序文に沿ったものとなるはずである。……（略）……／ロビンソン・クルーソーと異邦人との対話はこの点（筆者注：貨幣－利子率の存在による商品ストックの貸出から得られる収益）を証明するための非常によくできた経済的寓話で、これまでに書かれたこの種の寓話のいずれにも引けをとらない。だが、貨幣－利子率がいかに商品利子率と違って、負となり得ない理由を述べたはいいが、貨幣－利子率はなぜ正となるのか、その理由を説明する理由をまったく忘れていたし、貨幣－利子率がなぜ（古典派の主張するように）生産資本の収益を設定する標準によって支配されることがないのか、説明することができない。なぜなら流動性選好という観念が彼にはなかったからである。彼は利子率理論のわずか半分を打ち立てたにすぎない。……（略）……／スタンプ付き貨幣の背後にある考え方はまっとうである。そればかりか、それを適切な規模で実行に移す手段を見出すのも可能である。けれども、ゲゼルが直視しな

かった多くの問題があることもまた事実である。なかんづく彼は、貨幣は流動性プレミアムをもつ唯一のものではないこと、貨幣と他の多くの商品との違いは高々程度の差にすぎず、貨幣が重要性を獲得するのは、他のどんな商品よりも大きな流動性プレミアムをもっているからだということを知らなかった。貨幣がこのようなものだとしたら、スタンプ制度によって流通紙幣から流動性プレミアムが剥奪されたとしても、長い一連の代替品——銀行貨幣、要求払いの債権、外国通貨、宝石、貴金属類一般など——が貨幣の後釜に座るであろう。先に触れたように、収益とはかかわりあいのない、土地所有そのものに対する願望が利子率を高く維持するのに役立ったと思われる時代もあるのだ。もっともこの可能性はゲゼルの体系が実現したら土地の国有化によって消滅しているであろうが。」¹³⁾ ケインズのこのような評価にはゲゼルの思想に対する2つの批判が含まれる。すなわち、ゲゼルは流動性選好という観念がなかったということと、流通紙幣にスタンプを課し退蔵を回避しようとしても代替品が貨幣に取って代わるであろうということである。

これらの批判に対して、Herland (1977) は次のように述べる。「まず、ケインズは基本的な批判を表明している。「彼（筆者注記：ゲゼル）は流動性選好の観念を完全に見落としている」というのである。これは公正ではない。ゲゼルはその「貢租」をもって、ほかならぬケインズが「蓄財しないという決定に対する報酬」として利子を定義したことを言っているのである。……（略）……／他の代替物に関しては、これらが単に蓄財に使われるのかそれとも支払手段に使われるのか、に応じて区別されなければならない。前者の場合は土地のケースに類似している。これらの財を獲得するために、ひとはその流動性プレミアムを上回り、その保管費用を下回る率で借り入れを行おうとする。それゆえ利子率の低下は抑止されるが、この財が収益を生まないために、土地のケースようにはならない。反対に、代替品が交換手段として使われるなら、商品貨幣（貴金属貨幣）の体制に引き戻されるか、信用貨幣（外国通貨）の体制、そこでは領主権は外国の発行者のものとなるが、そ

13) Keynes (1936)、邦訳は147-151ページより引用。

うした体制に引き戻されるために、改革の前より後のほうが、状況はより悪化するであろう。こうした可能性があるのだから、銀行券以外の財が流通手段として流通することは、強制によって禁止されるべきであろう。」¹⁴⁾とある。

では、ゲゼルは『自由地と自由貨幣による自然的経済秩序』の中で「貢租」や代替品についてどのように書かれているのだろうか。まず「貢租」から見ていくことにする。「読者はここで正しく理解してほしい。私がここで語っているのは、商品が自分の仕事の報酬として要求し、また要求できる商業利潤のことでなく、貨幣保有者が貨幣を保持し続けることによって商品交換を妨害できることから、商品生産者に要求できる特別な利潤のことである。この特別な利潤は、商業利潤とは何の共通性もない。それは貨幣が徴収する特別な給付、つまり商品供給が全般的にしたがわざるをえない物質的強制から貨幣が自由であるために、貨幣によって徴収される貢租のことである。つまり、供給サイドにおける商品に内在する物質的強制と需要サイドにおける時間を超越した自由な意思、こうした関係の必然的結果として生まれる貢租のことである。今や商品は、貨幣がこのような自由を放棄することへの代償として貢租を支払う以外にはないのである。この貢租なしには、いかなる貨幣も供給されない。そして交換を媒介する貨幣に貢租を支払うことなしには、いかなる商品も消費者のところまでとどかない。……」¹⁵⁾

この引用からは Herland (1977) の指摘の通り、ゲゼルは「貢租」という表現で流動性プレミアムを理解していたことがわかる。次にケインズの示した代替品をゲゼルはどのように考えていたのか見てみることにする。ゲゼルによれば、「かくして貨幣が金細工師によって鋳つぶされるや、その分商品需要が失われる。そして不幸にも、こうした貨幣の脱鋳貨は、商品供給が増加しつつあるときに生じる。その時需要による価格決定のために、価格は下落する。そしてこの価格下落は商品交換や商品生産の中断を引き起こし、失業と乞食とを生むものとなる。／したがって、貨幣素材を装飾品産業の原材料とする金本位制度は、本来、富裕の成長という枝を付けた木の幹を切り落

14) Herland.M., (1977)、邦訳は 34-35 ページより引用。

15) Gesell.S., (1920)、邦訳は 316 ページより引用。

とすための鋸である。……（略）……／実際小切手は、現金と比較するならば、とりわけ扱いにくい支払手段である。複雑な形式的手続きを守らなくてはならないし、その現金化も一定の場所に限定されているからである。その上その現金化も、振出人や銀行の确实性に依存しているからである。……（略）……／他方、国民通貨の輸出入は重大な損失をもたらす。もし通貨が輸出されるならば、発券銀行は貨幣供給の独占権を奪われ、国内市場は外国権力、多くの場合敵対的な外国権力の支配下に陥ることになるだろう。そして外国のあらゆる通貨上の事件が国内に反作用を与えることになる。……（略）……／今や、その答えは与えられている。その答えは以下のように要約される。すなわち、こうした矛盾は、「汝を助ける者を、汝も助けなければならない」というキリスト教の教えを実践する自由貨幣によって解決される、と。それはこうである。「お前が自分のものを販売したいならば、お前もお前の隣人のものを購入しなければならない。お前が一〇〇マルクの商品を販売したならば、お前も一〇〇マルクの商品を購入しなければならない。すべての者がそのように行動するならば、すべての者は自分の生産物を完売し、すべての者は貯蓄可能である。だが、それ以外の者には、貯蓄者は、自らの貯蓄を実行する可能性を相互に奪われる」、と。」¹⁶⁾とあり、流通紙幣が代替品によって置換されることはゲゼル自身、否定的な見解をとっていたことがわかる（最初の引用はケインズが述べるころの宝石、貴金属一般が当てはまる。主に金について書かれているだけで宝石や貴金属一般とはゲゼルは明記していないが、「貨幣素材を装飾品産業の原材料とする」とあり、それには宝石や貴金属一般が含まれると考えてよいであろう。次の引用は要求払いの債権についてであろう。これについては現金と比べて取り扱いが困難であることを示している。3番目の引用は外国通貨についてである。これについては外国の影響が大きくなるということである。最後の引用は「銀行貨幣」についてであるが、これについてはやや遠回しな表現を用いている。ゲゼルの検討では貯蓄の前に消費をしなければ、貯蓄する可能性を奪われるとあり、ケインズ

16) Gesell.S, (1920)、邦訳は 327-473 ページより引用。

の述べるところの「銀行貨幣」に対しても自由貨幣が適用され、時間とともに減価していくものと考えられる。つまり、「銀行貨幣」=自由貨幣とゲゼルの想定では考えられており、ケインズの述べるところの銀行貨幣が自由貨幣の代替品とはなり得ない。ケインズがなぜゲゼルに対して前述のような態度をとったのか明らかでないが、Herland (1977) による指摘では「『一般理論』の著者はゲゼルの伝記に5頁のうち2頁を割いているのに、その経済学上の著作ほどには注意深く研究していない」¹⁷⁾とある。

以上がゲゼルの自由貨幣の概要であるが、彼の自由貨幣論を用いたもつとも有名な事例がオーストリアのヴェルグルで実施された労働証明書である¹⁸⁾。Onken (1938) によると、ヴェルグルは当時、国際的な恐慌の影響により1932年の春には失業者数は約400人に達しており（ヴェルグルの人口は4,200人であった）、こうした困窮に対処するためヴェルグル市長であるウンターグッゲンベルガー（Michael Unterguggenberger）はこのような困窮に対処するために市独自の「緊急対策計画」を策定した。その内容とは、緩慢にしか流通しない中央銀行の貨幣の代わりに毎月月初めに額面の1%にあたる額のスタンプを購入、それをあらかじめ印刷されている欄に貼付しなければ額面通りの価値を維持しないような貨幣（つまり月初めにスタンプを貼付しなければ、1%ずつ減価していく仕組みである）、労働証明書を流通させ、ヴェルグルの財政当局はスタンプ販売による収益を貧民救済基金に拠出するというものである。

Kennedy (1995) によると、労働証明書は「463回循環し、通常オーストリアシリングの21回をはるかに凌駕し」¹⁹⁾、ヴェルグルにおいては「1年で失業率を25%減少させ」²⁰⁾、市当局も「3840シリングの増収となり、収益は公

17) Herland (1977)、邦訳は34ページより引用。

18) 泉 (2000) によると、「30年代の地域通貨の中で、最も有名な事例は、オーストリアのチロル地方の小さな町であるヴェルグル (Woelgl) での成功例である。……」とある。23ページより引用。

19) Kennedy (1996)、邦訳は13-14ページより引用。

20) Kennedy (1996)、邦訳は14ページより引用。

共事業に使われた」²¹⁾のである。また、泉(2000)によれば、このようなヴェルグルでの成功によってオーストリアの200以上の都市で採用が決定されたが、1933年の9月に「中央銀行は、国内の通貨量をコントロールするのが困難になり、インフレを引き起こす可能性があると考え、地域通貨を国民通貨の国家独占を乱すものと見なし」²²⁾、1933年11月には「完全に地域通貨は発行禁止となった」²³⁾のである。

2.2: アメリカにおける地域通貨の実践とアーヴィング・フィッシャーのスタンプ代用貨幣

このように、ヴェルグルやその他ヨーロッパ各地で実施された地域通貨であるが、アメリカにおいても注目されていた²⁴⁾。Greco(1994)によれば、アメリカで発行されていた地域通貨の中で興味深い例はシカゴの新聞配達人、キャスロウ(W.H.Caslow)が1933年に発行した復興証書であるとされる²⁵⁾。以下、Greco(1994)に従い、この地域通貨の特徴を見ていくことにする。

この通貨はヴェルグル・タイプの地域通貨とは違い、取引ごとに買い手が

-
- 21) このようにゲゼルの自由貨幣論の具体的実践としてヴェルグルにおける労働証明書をあげることができるが、ゲゼルは地域通貨に対して賛成であったのかというと、そうではない。むしろ、通貨管理は国家が一元的に行うべきであるとしていた。「したがって、貨幣制度には統一性が必要になる。それがどれほど必要となるかは、たとは複本位制度ですら貨幣過多であるとされ、その撤廃がなされたという事実からもある程度窺うことができるだろう。それゆえ、たとえ金本位制度の採用の点で一致している場合でも、もし鑄貨の生産をすべての人々の自由に任せたならば、どのような事態が生じるだろうか。そのような場合には、純度の異なった鑄貨が一緒に流通することになってしまうだろう。そんなことは絶対に不可能である。……」Gesell,S,(1920)、邦訳は239ページより引用。
- 22) 泉(2000)25ページより引用。
- 23) 泉(2000)25ページより引用。
- 24) この点について泉(2000)は次のように述べる。「シュバネンキルヘンやヴェルグルのケースは(筆者注:シュバネンキルヘンはドイツの都市であり、そこでは地域通貨「ヴェーラ」が発行されていた)、30年代のアメリカで非常に関心を持って眺められ、……」26ページより引用。
- 25) 「興味深い例のひとつはシカゴの新聞発行人、キャスロウ氏が出した復興証書(Recovery Certificate)です。このスクリップは、一九三三年から発行が開始されました。」Greco(1994)、邦訳は91ページより引用。

2セントのスタンプを裏面の所定の欄に貼らなければならないものであった。この欄は54ヶ所あり、スタンプですべて埋まれば、1ドル8セントの価値になる。この地域通貨の額面は1ドルであり、欄がすべて埋まった状態のものから1ドルを差し引いた残りの8セントがシステムの運営費に充てられるという仕組みである。

キャスロウは自身で発行している新聞により参加者を募ったが、参加者が増えすぎ、復興証書が過剰に出回るようになり、結局失敗に終わったとしている。失敗の原因として、この復興証書は発行者がキャスロウのみである、スタンプはキャスロウか代理店のみで購入可能である、スタンプの販売収入の管理については何の言及もなくスタンプの売上はキャスロウの事業収入に入ると考えられるということから、スタンプをすべて貼り終わった復興証書をキャスロウのもとに持ち込んだとしても、ドルに現金化できるかどうかは彼の人柄と新聞ビジネスの具合にかかっていたことよるとしている。

このようなタイプの地域通貨が流通していたのはアーヴィング・フィッシャー (I.Fisher) がヴェルグル・タイプのスタンプ代用貨幣をアメリカで紹介するまでであったとされている²⁶⁾。フィッシャーはゲゼルの貨幣の考え方をアメリカに広めようとしたのである²⁷⁾。

フィッシャーはスタンプ代用貨幣を「従来使われてきたような、見限られている正規通貨の一般的な代替物である」²⁸⁾と定義し、預金、投資、使用が可能なことから貨幣に似ているが、一方で保有され得ないために貨幣に似ていないとしている。

また、一定期間流通した後、現金に再び換えられなければならないとし、その特徴として、毎週決まった曜日に該当欄にスタンプを貼らなければ(こ

26) この点について泉(2000)は次のように述べる。「フィッシャーがこの事例を紹介する以前は(筆者注:この事例というのはペンシルバニア州のリーディングという町のシステムである)、紙幣を使用する度に、印紙を貼るというシステムが多く見られた。……」30ページより引用。

27) この点についてKennedy(1995)は次のように述べる。「……コーセンは経済学者のアーヴィング・フィッシャーと共にゲゼルの貨幣の考え方を米国で広めようとした。」、邦訳は14ページより引用。

28) Fisher(1933)、邦訳は5ページより引用。

のスタンプ代は2セントと想定されている)、この通貨は使用できないとしている(決まった曜日というのはフィッシャーの説明では水曜日)。この代用貨幣の額面を1ドルと想定しており、1年後には1,000ドル発行して、1,040ドルが手元に残り、この超過分の40ドルをシステムの管理運営に充てるとしている。

泉(2000)によれば、このフィッシャーのスタンプ代用貨幣を理論的背景としてアメリカ全土で300以上の地域で地域通貨が発行されたが²⁹⁾、1933年3月4日に「ルーズベルト大統領は「スタンプ付き貨幣」の使用及び発行を禁止することを決定し、巨額の中央集権化された経済計画を中心にしたニューディール政策を発表した³⁰⁾」のである。

以上、オーストリアとアメリカで実施された地域通貨の理論的背景及び具体的事例を見てきたが、こうしたヴェルグル・タイプの地域通貨はオーストリアやアメリカ以外にもドイツやスイスなど多くの地域で見られた³¹⁾。また、この1930年代の特徴として、「流通した貨幣の多くは、スタンプ付き貨幣であり、中央の管理局が貨幣を発行して³²⁾」おり、「地域内の貨幣の流通速度が上昇し、それに伴って財・サービスの流れも復調した³³⁾」。さらに「中央の権力、主に中央銀行によって2～3年後には中止に追い込まれた³⁴⁾」ということをあげることができる。

29) 「……全国的な通貨不足を補うために最終的にはアメリカ全土の300以上のコミュニティや村から、アイオワ州やセントポールなどの都市までヴェルグル・タイプの地域通貨が発行された。その理論的支柱であったのが、当時エール大学で教授をしていたアーヴィング・フィッシャー (Irving Fisher) であった。……」

泉(2000) 26ページより引用。

30) 泉(2000) 27ページより引用。

31) 泉(2000)はこの点について次のように述べる。「そしてゲゼルの理論を実践に移した具体的な動きは、1930年代前半ドイツ・オーストリア・アメリカ・スイスなど多くの地域で見られた。……」、21ページより引用。

32) 泉(2000) 21ページより引用。

33) 泉(2000) 21ページより引用。

34) 泉(2000) 21ページより引用。

3. 1980年代以降における地域通貨の復活と新たな意義

3.1：コミュニティの再生と地域通貨との関係について

1930年代に機能停止に追い込まれた地域通貨であるが、1970年代末以降の大量失業や環境破壊などから再びゲゼルの理論を活かした地域通貨の関心が高まってきた³⁵⁾。そうした中で1972年にアメリカのニューハンプシャー州でラルフ・ボーソディ (Ralph Borsodi) により導入されたコンスタントは1980年代以降の地域通貨に大きな影響を与えた³⁶⁾。

そういった背景を持った1980年代以降の地域通貨であるが、この4節ではその中でも代表的なものとしてLETS、TIME DOLLARS、RGT、TORONTO DOLLAR、ITHACA HOURS、WIRを取り上げる³⁷⁾。この項ではLETS、TIME DOLLARS、RGTを見ていくことにする。LETS、TIME DOLLARSについては泉 (2000)、RGTについては廣田 (2000) に則して見ていくことにする。

LETSであるが、1983年にカナダのコモックス・バレーでマイケル・リントン (Michael Linton) によって開始された。リントン (Michael Linton) が行っ

35) この点についてヴェルナー・オンケン (W.Onken) は次のように述べる。「……しかし、七〇年代末以降、大量失業、環境破壊および国際的な債務危機によって、忘れられていたゲゼルの代替経済モデルへの関心が高まってきた。……」Onken (1992)、邦訳は28ページより引用。

36) この点について泉 (2000) は次のように述べる。「……1972年にアメリカのニューハンプシャー州のExterにおいて、ラルフ・ボーソディによって導入された“Constants”は、1980年代以降の地域通貨の新たなうねりに対して大きな影響を及ぼしたと思われる。人口約9000人の町で、この地域通貨は、ヴェルグルのケースのように地方政府の後押しがないにもかかわらず、急速に普及していった。……」泉 (2000) 1ページより引用。

37) 泉 (2000) は、「……現在世界で流通している代表的な地域通貨を5種類取り上げ、……」とあり、その5種類とはLETS、TIME DOLLARS、TORONTO DOLLAR、ITHACA HOURS、WIRを取り上げている (泉 (2000) 2ページより引用)。

なお、泉 (2000) で取り上げている個所はLETS (2-8ページ)、ITHACA HOURS (8-11ページ)、TORONTO DOLLAR (12-15ページ)、WIR (15-19ページ)、TIME DOLLARS (19-21ページ) である。そして、RGTであるが、泉 (2000) において、「その他にも代表的な地域通貨の事例として、メキシコのTlalocや、アルゼンチンのRGT (Red Global de Culbes de Trueque Multi-Reciproco)」などを挙げることができる。」とある。22ページより引用。

た LETS は地域経済の活性化を目的にしていた。その仕組みは以下の通りである。この LETS は、会員間にだけ通用する地域通貨であり、事務局は定期的に会報の発行を行い、この会報により財・サービスの供給者と需要者とで調整を行う。その後、相対で代価の交渉を行う。その際にグリーンドルという地域通貨を用いるのである（便宜上 1 グリーンドル=1 カナダドルという形を取る）。取引後は LETS 事務局に結果が報告され、各メンバーの勘定に記録される。個人勘定でプラスが増加したとしても、その地域の LETS でしか使えず、マイナスが増加しても債務返済の義務はない。LETS 内で取引を続けることで収支のバランスを回復するというものである。また、こうした取引による利子はない。

こうした LETS は、イギリス、オーストラリア、アメリカ、フランス等、英語圏の国を中心に広がった³⁸⁾。リントンが開始した LETS は地域経済の活性化を目指すものであったが、イギリス、オーストラリア、フランスにおいてはコミュニティの再生に目的が置かれていた。オーストラリアにおいては、「地域・コミュニティ内での交換を促進することによって、社会的ネットワークの再構築を狙って」³⁹⁾おり、イギリスでは、「コミュニティ形成に重点が置かれ」⁴⁰⁾、フランスにおいても、「SEL（筆者注：フランスの地域通貨）の目的を「人のつながりを作り出す」と」⁴¹⁾している。

カナダ型の LETS は、全世界的に普及しなかった⁴²⁾。その理由として、ビジネス関係者にとって「LETS システムでは、取引の度に記帳し、事務局に報告しなくてはならず、使い勝手が必ずしもよくなかった」⁴³⁾ことがあげら

38) この点について泉（2000）は次のように述べる。「現在では欧米各地に LETS が拡大しており、イギリスに 400 地域以上、オーストラリアに約 170 地域、フランスに約 300 地域、そしてアメリカに 110 地域など、英語圏への国を中心にして 1200 以上の地域が LETS に取り組んでいる」、3 ページより引用。

39) 泉（2000）5 ページより引用。

40) 西部（2006）46 ページより引用。

41) 川野（2002）48 ページより引用。

42) この点について泉留維（2000）は次のように述べる。「……カナダ型の LETS が、世界的に普及せずカナダ国内でも限定的な広がりしか見せなかった……」、7 ページより引用。

43) 泉（2000）7 ページより引用。

れ、また、コミュニティの再生型の LETS がこれほど普及したのには、「コミュニティ再生という目的や社会・経済的背景に LETS という地域通貨システムが適合していた」⁴⁴⁾ ためであるとしている。

次に TIME DOLLARS については 1980 年代初期にアメリカでエドガー・カーン (Edger Cahn) によって考案されたとしている。その基本的なシステムは参加者が提供するサービスを時間で計り、そうして貯蓄された時間が他の人からのサービス提供に充てられるというものである。また、1TIME DOLLARS はドルとの交換性はなく、1時間のサービス時間との関係しかないとしている。LETS 同様、利子は付かず、マイナスの TIME DOLLARS であっても取引を行うことができる。さらに TIME DOLLARS は現在サービスを必要とする人や団体に寄付することが可能である。LETS との違いは TIME DOLLARS は事務局がサービス需要者に対してサービス提供者を検索・派遣すること、そして、LETS は市場経済の価値づけを使用しながらコミュニティの再生や地域経済の活性化を目指していたが、TIME DOLLARS はそれがなく、時間を基準に価値づけを行っていることであるとしている。

この TIME DOLLARS の特徴としては「非市場経済の部分である補完的な経済、特に家計部門を顕在化させ、循環を発生させること」⁴⁵⁾ であるとしている。しかし、一方でこのシステムはコミュニティを生み出すということに重点がおかれているために「完全に崩壊しているコミュニティを初めから構築することには有効であると思われるが、時間に基づく画一的な価値づけが行われるため、主流の経済および補完的な経済における経済的效果はあまり望まず、コミュニティの状態によっては受け入れがたいものである」⁴⁶⁾ という指摘もなされている。

最後にアルゼンチンの RGT である。このシステムはカルロス・デ・サンソ (Carlos de Sanzo) ら複数の創始者によって 1994 年から 1995 年にかけて始められた。RGT の創設にあたり、構想されていたのはグローバル経済の

44) 泉 (2000) 7 ページより引用。

45) 泉 (2000) 21 ページより引用。

46) 泉 (2000) 21 ページより引用。

中で排除された人を救済するための保護市場を形成することにあつた。設立当初は LETS のようにパソコン上の通帳に記帳する方式が採用されたが、記録に大変な労力を要することから、クレジットと呼ばれる紙幣方式に変更された。RGT の基本原則の 2 に「われわれの目的は商品やサービスの販売促進ではなく、労働や理解、そして公正な取引を通じてより高い意味での生活に到達するべく相互扶助を行うべきである」⁴⁷⁾とあり、このシステムは相互扶助を基本にした互助のシステムと捉えることができる。

RGT の仕組みは以下の通りである。1 クレジットが 1 ペソに対応しているが、ペソとの交換はできず、ペソの使用は禁止されている。そして新規の参加者に対して 50 クレジットを発行し、取引後にはその 50 クレジットを事務局に返還する必要がある。発行された 50 クレジットを返還しなければならない理由として、クレジットは参加者のの所有物ではなく、RGT を利用するための必要不可欠なものであるためとしている。

RGT は単なる余剰物の交換のためだけのシステムではなく、社会との関わり方や自分の潜在的可能性を発見するためのものであるとしている。また、このシステムを活用する際にはどのような形で社会に役に立つのかを考えることであるとされている。

以上、LETS、TIME DOLLARS、RGT の事例を見てきたが、これらの事例に共通することは、コミュニティの構築や再生、あるいは相互扶助による互助を主な目的にしているということである。しかし、高畑 (2005) が述べるように、「地域通貨が成立している場合、それは、その地域通貨を採用しているコミュニティ (社会) のメンバーが、それぞれが生活を営んでおり、生活諸主体として互いを認め合い、互いの存在を承認し人格的關係を形成して、地域通貨を媒介手段とする共同空間を構成しているということ象徴しているということになる」⁴⁸⁾ と言え、地域通貨の相互扶助的な側面は、地域通貨にもともと備わっているものということができる。これら 3 つの事例から明らかなことは地域通貨の相互扶助的な側面を前面に押し出し、それをシ

47) 廣田 (2000) 8 ページより引用。

48) 高畑 (2005) 156 ページより引用。

ステム化したことにあると言えるだろう。

3. 2：地域経済活性化と地域通貨との関係について

前項では相互扶助を目的にした地域通貨を取り上げたが、この項では TORONTO DOLLAR、ITHACA HOURS、WIR を取り上げる。これら3つの事例について泉（2000）に従って見ていくことにする。

TORONTO DOLLAR は1998年にジョイ・コガワ（Joy Kogawa）によってカナダで始められた⁴⁹⁾。その仕組みについてはTORONTO DOLLARは市内の交換所でカナダドルと交換し入手できるとしている。1カナダドルは1TORONTO DOLLARと交換されるが、交換されるカナダドルの額面10%はコミュニティ機関を支援するための基金に寄付される。また、TORONTO DOLLARは紙幣方式のために偽造の懸念がある。それを防止するためにカナダドルと同じ印刷工場で印刷されている。

TORONTO DOLLARの役割として、①地域経済の活性化、②地域内での資金の循環、③コミュニティの意思決定権の奪還、④新たな雇用機会の創出、⑤コミュニティの非営利事業の支援ということがあげられている。こうしたことからTORONTO DOLLARは「大企業の支配からの脱却、コミュニティのビジネス、NPOの支援、コミュニティに購買能力を閉じ込めることなどによって、地域コミュニティの社会ネットワークが強化され、地域経済が活性化」⁵⁰⁾しうるものであると言える。

次にITHACA HOURSである⁵¹⁾。1991年にアメリカのニューヨークでポー

49) Greco (1994) はこの点について次のように述べる。「<トロント・ドル>はこの地域に住む有名な作家、ジョイ・コガワ (Joy Kogawa) が生みの親です。…… (略) …… <トロント・ドル>の発行が開始されたのは、一九九八年十二月のことです。……」 Greco (1994)、邦訳は169ページより引用。

50) 泉 (2000) 15ページより引用。

51) 三上 (2001) によれば、ITHACA HOURSは前述のロバート・オーウェンの「労働証書」を参考にしたとしている。「そう考えたグローバー氏が参考にしたのは1830年代に社会主義者ロバート・オーウェンが英国で試みた「労働証書」だった。オーウェンはだれにも平等にあるはずの時間を取引の決済に用いようと考えた。グローバー氏はその「労働証書」をヒントにして独自の紙幣をデザインした。……」三上 (2001) 21ページより引用。

ル・グローバー (Paul Glover) を中心に始められた。LETS 方式が 1987 年からすでに存在していたが、LETS を管理していた事務局が 1988 年に閉鎖し中断に追い込まれた。グローバー (Paul Glover) は取引を事務局に報告しなければならないのは非常に煩雑であり、単純なシステムが必要であると考えた。そういったことから少額の取引での使用が簡便な紙幣方式が ITHACA HOURS ではとられている。また、偽造防止のために透かしなどが施されている。1 アワーは 10US ドルにあたる。10US ドルという基準はニューヨーク・イサカ市が所在するトンプキン郡の 1 時間当たりの平均賃金に相当するためであるとしている。

その仕組みは新たな参加者は事務局に提供可能な財・サービスの登録を行い、登録時に住民は 1 アワー、ビジネス関係者は 2 アワーズを受け取り、新規登録以外の者は 1 アワーを事務局に支払い、定期的に発行されるタブロイド紙に提供可能な財・サービスを掲載することができる。また、ITHACA HOURS の発行権は ITHACA HOURS 委員会にある。新たな ITHACA HOURS が発行されるには次のような場合である。すなわち、①新規の参加者の加入、②継続的に広告宣伝を依頼し、参加者であり続けた際に 8 ケ月ごとに提供されるボーナス、③コミュニティ機関への寄付、④参加者がコミュニティに貢献する事業を起業する際の融資であるとしている。

ITHACA HOURS は「コミュニティの自助の促進、ひいてはイサカ市の経済・社会の活性化のためにアワーズを利用している」⁵²⁾のである。また、「地域および住民の手に貨幣の循環を取り戻す手法であり、また経済のグローバル化で失った自己決定権の回復につながっていく可能性を持つ貨幣と言うことができる」⁵³⁾のである。

最後に WIR である。この WIR は 1930 年代に導入された地域通貨の中で唯一現在まで続いているものである⁵⁴⁾。この地域通貨は 1930 年代の他のヨー

52) 泉 (2000) 11 ページより引用。

53) 泉 (2000) 11 ページより引用。

54) この点について泉 (2000) は次のように述べる。「30 年代に導入された地域通貨システムの中で唯一現在まで続いているのがスイスで行われたものである。その地域通貨は“WIR”といい、……」15 ページより引用。

ロッパやアメリカの地域通貨同様市民に歓迎されたが⁵⁵⁾、機能停止に追い込まれなかったのは1936年に「スイスの銀行法に基づくWIR銀行となった」⁵⁶⁾ということがあげられる。

WIRについてはこのシステムに参加するためには企業は入会料、年会費、取引に対する手数料を支払う必要がある。1WIRは1スイスフランと等価である。現在のWIRの融資利率はスイスフランよりも低い利率となっている。WIRは利子や信用創造機能があり、「スイスにおける中小企業経営者の相互扶助組織」⁵⁷⁾と言える。

以上、TORONTO DOLLAR、ITHACA HOURS、WIRについて見てきたが、これらの地域通貨に共通する点として地域経済の活性化を目的にしているということである。1930年代の地域通貨と違う点としてWIRを除き、他の2つの地域通貨はコミュニティ機関へそれぞれの地域通貨を寄付できるということがあげられる。こういった点は地域経済の活性化を目的にした1980年代以降の地域通貨はコミュニティの再生を同時行わなければならないということが言える⁵⁸⁾。

さて、これら6つの1980年代以降の地域通貨を見てきた。その特徴として、「様々な目的・形態を持った通貨が流通して」⁵⁹⁾おり、「必ずしも地域経済の再興・活性化の目的のみで導入されていない」⁶⁰⁾のである。さらに「流通範

55) この点について森野(2000)は次のように述べる。「……その出発が成功裏に経過したことは、創始者たちがとても熱心に取り組んだこと、また多大な金融上の犠牲にもかかわらずその理念を守ろうとし、そして、中小規模事業者がこれを歓迎し好意的な見方をもってくれたという事実によって説明される。……」55ページより引用。

56) この点について泉(2000)は次のように述べる。「……36年にスイスの銀行法に基づく銀行となった」16ページより引用。

57) 泉(2000)19ページより引用。

58) 1930年代においては現在のようにコミュニティの荒廃が進んでおらず、4.1で述べたように地域通貨にコミュニティ再生の機能があつたとしても、それに気づいていなかったと言える。「……コミュニティの崩壊や自然環境の悪化などの問題は、当時(筆者注：1930年代)大きな関心事とは言えず、これらに対する動機付け・機能を求めるほうが無理とは言える。」泉(2000)28ページより引用。

59) 泉(2000)1ページより引用。

60) 泉(2000)1ページより引用。

囲の制約が、特定の社会コミュニティ内という新しい形が現れた」⁶¹⁾ ということをあげることができる。

4. 今後求められる地域通貨の役割について

以上、地域通貨の諸潮流について見てきたが、地域通貨はグローバリゼーションによる地域経済社会の荒廃に対して非常に有効な手段であることが明らかとなった（1節で述べたようにリカードウの比較優位論は普遍的なものではありえない。このことから比較優位論はその時代に制約される。現在の経済社会に比較優位論を適用しようとするとりカードウが思い描いていたような自由経済社会は実現し得ない）。経済的な側面で見ると、2節において述べたように、ケインズによって過小評価をされてしまったが、流動性プレミアムを「貢租」という表現で理解し自由貨幣の代替品の検討も行っていたゲゼルによる自由貨幣論やフィッシャーのスタンプ代用貨幣を実践した（ゲゼル自身は自由貨幣論が地域通貨として使用されたことは本意ではなかったであろうが、歴史的事実として地域通貨という形で行われた）、1930年代のヨーロッパやアメリカにおいて実施された地域通貨においては地域独自の通貨を発行することにより、一時的にはあるにせよ、地域経済の回復に成功している。

一方で3節で述べたように、LETSのような地域通貨の形態が登場して以来、地域通貨をコミュニティの再生の手段としてのみ見る地域通貨が各地で行われるようになった。そうしたコミュニティの再生も重要ではあるが、地域経済の活性化等の地域通貨の持つ多様性に注目をしなければ、強い体質は作られ得ない。地域通貨の目的がコミュニティの再生のみでは、経済危機が発生した場合、人は自らの生活を維持するために地域通貨のシステムから離脱してしまうということも考えられ、そうなれば、参加者の減少から当初の目的でもあったコミュニティの再生も達成できないということになり得る。

そのためには、地域通貨を活用することにより地域の有能な人材が地域外

61) 泉 (2000) 1 ページより引用。

に流出することを防ぐ必要がある。つまり地域の企業により雇用を維持するということである。そうすることで、伝統文化の継承や発展が可能になり、また、伝統文化による若い人材の教育効果も期待できる。

さらに地域通貨を活用することによる地域経済の活性化と関連して健全な投資という効果があげられる。1節で述べたように金融のグローバリゼーションにより、投機的な投資が頻繁に行われるようになり、結果として地域経済社会を荒廃させることとなった。そうした投機的な投資が行われる理由の一つとして銀行の預金が預金者の目の届かないところで使用されるという点にある。ところが、スイスの地域通貨である WIR のように地域通貨を使用した投資を行うと、従来の貨幣による投資と比べて地域で資金が還流するために投資された資金の監視が行いやすい。こうすることで投機的な投資を防ぐことができる。

このような観点から導き出される、これからの地域通貨の役割とは以下の点である。すなわち、地域通貨とはコミュニティの再生という機能に限定されるべきではない。この点は3節において強調したが、しかし一方でその役割は地域経済の活性化のみでもない。この点は重要である。というのも、今後の地域通貨の役割が地域経済の活性化のみでは現在発生している問題に対応することが困難であるからである。3節で述べたように1930年代の地域通貨においてなぜ地域通貨に元来備わっているコミュニティの再生という機能が顕在化しなかったかということ、地域通貨に頼らずとも1930年代という時代は人々が現在よりもより密接にかかわり、コミュニティの再生ということは問題にならなかったからである。しかし、現在はコミュニティの再生に加えて地域経済もまた疲弊している。こうしたことから、コミュニティの再生に目を向けつつも地域経済の活性化を目指している TORONTO DOLLAR や ITHACA HOURS のように多様な可能性を持った地域通貨に目を向けるべきである。

参考文献

- 泉留維 (2000) 「地域通貨の有効性についての考察 (1)(2)」『自由経済研究』, 第 15 号, 第 16 号。
- 内野耕太郎 (2003) 「地域通貨に関する一試論—起源、法的性質、経済政策—」『青山経済論集』 第 54 巻第 4 号。
- 金子勝 (2010) 『新・反グローバリズム 金融資本主義を超えて』岩波現代文庫。
- 川野英二 (2002) 「フランスの社会・連帯経済と地域交換システム」『自由経済研究』, 第 23 号。
- 佐伯啓思 (2009) 『大転換 脱成長社会へ』NTT 出版。
- 高畑明尚 (2005) 「地域通貨と現在の経済・社会のシステム」『琉球大学経済研究』 第 70 号。
- 西部忠 (2006) 「地域通貨：統合型コミュニケーション・メディア」『都市問題』 第 97 巻第 7 号。
- 廣田裕之 (2000) 「アルゼンチン RGT の現状」『自由経済研究』, 第 17 号。
- 三上喜美男 (2001) 「地域通貨が開く未来」『兵庫地域研究』 通巻 23 号。
- 森野栄一 (2000) 「WIR バンク、資料紹介 (1)」『自由経済研究』, 第 15 号。
- Fisher, I. (1933) *Stamp Scrip* New York Adelphi Company (邦訳「スタンプ 代用貨幣」『自由経済研究』, 森野栄一訳, ぱる出版, 1995, 第 2 号。)
- Gesell, S. (1920) *Die natuerliche Wirtschaftsordnung durch Freiland und Freigeld*, 4, Berlin. (邦訳『自由地と自由貨幣による自然的経済秩序』相田 慎一訳, ぱる出版, 2007。)
- Greco, T.H.Jr. (1994) *New Money for Healthy Commuties*, Tucson Arizona (邦訳『地域通貨ルネサンス — まち起こしマネー戦略』大沼安史訳, 本の泉社, 2001。)
- Herland, M. (1977) *Perpetuum Mobile et Credit Gratuit*, Deux propositions oubliees pour ameliorer le fonctionnement d'une economie monetaire, *Revue Economique* Vol XVIII N.6 Novembre. (邦訳「永久運動と無償信用論 — 貨幣経済の作用を改善するための忘れられた二提案」『自由経済研究』, 森野栄一訳, ぱる出版, 第 3 号。)
- Kennedy, M. (1996) *Interest and Inflation Free Money*, Seva International. (邦訳「金利ともインフレとも無縁な貨幣」『自由経済研究』, 小森和夫訳, ぱる出版, 第 8 号。)
- Keynes, J.M. (1936) *The general theory of employment, interest and*

- money*, Macmillan London. (邦訳『雇用、利子および貨幣の一般理論 (下)』間宮陽介訳, 岩波文庫 2008。)
- Keynes, J.N. (1917) *The Scope and Method of Political Economy*, 4th Edition, Macmillan. (邦訳『近代経済学古典選集第2期 経済学の領域と方法』上宮正一郎訳, 日本評論社 2000。)
- Onken, W. (1938) “Ein vergessenes Kapital der Wirtschaftsgeschichte — Schwanenkirchen, Woergl und andre Freigeldexperimente,” *Zeitschrift fuer Sozialoekonomie*, 57, 58. (邦訳「経済史の忘れられた1章 — シュヴァーネンキルヒュン、ヴェルグル、およびその他の自由貨幣の実践 (上)(下)」『自由経済研究』宮坂栄一訳, ぱる出版, 2000, 第15号、第17号。)
- Onken, W. (1992) *Marktwirtschaft ohne Kapitalismus — Eine Uebersicht ueber die Grundgedanken, die ideengeschichtliche Herkunft und den derzeitigen Entwicklungsstand, ueber Organisationen und weiter fueehrende Literatur*, Varel. (邦訳「“資本主義によらない市場経済” — その基本概念、歴史的発展と現状について」『自由経済研究』, 宮坂栄一訳, ぱる出版, 1997, 第9号。)
- Ricardo, D. (1819) *On the principles of political economy, and taxation*, 2nd ed, London. (邦訳『経済学および課税の原理 上巻』羽鳥卓也・吉澤芳樹訳, 岩波文庫, 1987。)
- Schumpeter, J.A. (1934) *The theory of economic development : an inquiry into profits, capital, credit, interest, and the business cycle*, Harvard University Press. (邦訳『経済発展の理論 企業者利潤・資本・信用・利子および景気の回転に関する一研究 (上)』塩野谷裕一・中山伊知郎・東畑精一訳, 岩波文庫, 1977。)
- Sigliz, J.E. (2002) *Globalization and its discontents*, New York W.W.Norton. (邦訳『世界を不幸にしたグローバリズムの正体』鈴木主税訳, 徳間書店, 2002。)
- Stigliz, J.E. (2006) *Making globalization work*, New York W.W. Norton (邦訳『世界に格差をバラ撒いたグローバリズムを正す』楡井浩一訳, 徳間書店, 2006。)